

きょうを

詩元

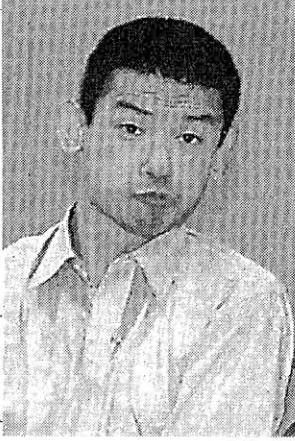
「すなはち自由主義は吾輩われの單一なる神にあらざるなり、吾輩は或る点について自由主義を取るものなり、ゆえに吾輩は自由主義もとよりに味方すべし、然れども吾輩の眼中には、干涉主義もあり、また進歩主義もあり保守主義もあり、平民政義もあり貴族主義もあり、おのの適当の点に据え置きて吾輩は社交および政治の問題を裁断すべし」

陸羯南の言論を振り返る

こうした陸の相貌は、現代

とりべラリズムの融合を目指すものであった。実際、陸が主宰した新聞『日本』には、三宅雪嶺・志賀重昂・長谷川如是閑・古島一雄といった人材が集つたけれども、陸の「国民主義」におけるナショナリズムの側面を繼いだのが三宅や志賀であり、そのリベラリズムの側面を継いだのが長谷川であつたということになる。

櫻田 淳



さくらだ・じゅん 政治学者・東洋学園大学准教授。一九六五年宮城県生まれ。八戸高校、北大卒、東大大学院法学政治学研究科修了。政治・外交を中心に論陣を張る。著書に「國家への意志」(中公叢書)など。

柔軟で多様な「公論」

導の性急な西洋化に疑義を唱える一方で、日本の「伝統」を擁護した。故に、陸の諭説は「国民主義」と呼ばれ、陸自身は現在では「明治ナショナリストの典型」として位置付けられている。

しかし、陸の「国民主義」それ自体は、ナショナリズムの人々の眼には、無足見無節操と映るものであるかもしない。しかし、陸は、人間の諸々の主義主張には、どのようなものであれ真理を含まないものはないが故に、「一つの主義主張を極点まで追うことによって他と相容れない状態に至り、自ら錯誤を犯す」のである。

陸にとつて大事であったのは、「日本国民の隆昌を謀る」ことであった。前に引用した『近時政論考』の記述は、そうした单一の主義主張に耽溺しない陸の姿勢を示しているのである。

御代の雰囲気とは何と似通つてゐることであつたか。
振り返れば、「ベルリンの壁の崩壊」という世界史上の一
大変動から既に十八年、日本
の政界の構図を規定してき
た「五五年体制」の崩壊から
も十四年近くの歳月を経た
今「グローバリゼーション」
の奔流の中にある日本の今後
を展望する上でも、柔軟にして
多様な「公論」が要請され
ているはすぐである。

が幅を利かせた明治期の社会主義体制の中では、明らかに傍流の存在であった。しかし、その傍流の存在が、後の時代の言論界への種を蒔いた。戦後を代表する碩学・言論家であつた丸山真男も、陸の言論を評価した。

路線もまた、日本の諸々の制度を根底から築き直す「構造改革」の趣を持つていたけれども、陸はその明治期の「構造改革」を前にして誠に豊饒な言論を展開したのである。とすれば、平成の御代においても、陸が「日本国民の隆昌を謀る」という一点に拠つて展開した言論の意義は、再び確認されるべきものかもしれない。奥州の地は、再び陸に類する人材を輩出できるのであろうか。

あすを 考 え る

あすを 考 え る

「東奧日報社提供」

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。